

謎の馬絵画家

露山 探訪記



数十年も昔。白石に一人の画家が住んでいた。明治から大正、昭和という激動の時代。道内の農家を渡り歩き、馬の「肖像画」や墨絵を描いて数日の宿と糧（かて）を求めた。いわゆる漂泊の画家であった。画家の名は「露山（ろざん）」。「彼が後世に残したものは、道内に数多く残る良馬の絵と伝説的なエピソードであった。」

謎の画家露山と出会う

馬絵画家、露山。その人物に初めて興味を抱いたのは、数カ月前のことだった。白石区在住の郷土史研究家、南部享さん（六）が、自宅に面白い絵が残っていると見せてくれたのがきっかけだ。年代物の額縁には、七頭の馬が描かれた絵が収められていた。前足をけり上げる馬や親子と思われる馬。正面をヒタと見据

える馬もいる。ビロードのような皮膚の質感やはち切れんばかりに躍動する筋肉。画材は木炭であろうか。たてがみなどは細部まで描き込まれ、まるで写真のような描写だ。絵の角には、鮮やかな朱で「露山」の落款が残されている。この絵は南部さんの父親が露山に描いてもらったのだという。昭和二十年ころ。今から六十年ほど前のことだ。南部さんは、そのころ露山に会っているという。「当時六十

歳ぐらいの人でね。酒を飲みながら何時間も飽きずに馬を眺めていたよ」。露山は、ばん馬のような大型の農耕馬を専門に描いた画家で、少なくとも数点の絵が市内に残っている。白石に住み、農家で食べ物や酒を分けてもらう代わりに絵を描いていた。だが、その経歴については全く知られていないという。この風変わりな画家の生涯が無性に知りたくなっていた。

数日後、南部さんの紹介で、露山の絵を持っているという区内在住の伴泰治さん（七）と岩瀬功さん（八）を訪ねた。二人とも家は農家だったという。持っている絵は、いずれも当時飼っていた農耕馬の肖像画で、小豆などと交換したそう。昭和二十年から二十三年ころだという。当時、どこの農家でも馬を飼っていた。馬が貴重な労働力であり、大事な家族であり、また大切な資産でもあった時代だ。所有馬の絵を描いてもらうのは、